

朱門何足榮

未若託蓬萊

臨源把清波

陵崗掇丹萸

靈谿可潛盤

安事登雲梯

漆園有傲吏

萊氏有逸妻

進則保龍見

退爲觸藩羝

高蹈風塵外

長揖謝夷齊

みやこで富貴の朱門のうちに住むことは何とて榮はまれとするに足ろうぞ

それは草深い山林に身を寄せるのには及ばない。

(その山林では) 川の源にのぞみ清らかな水を汲んで飲み、

岡にのぼって丹芝の若芽を取って食べる。

その谷川の辺は人知れず遊びまわるのに、ふさわしいから

はしごで高くに登るとき朱門の榮達を求めることなど何とて願おうぞ。

昔、河南の漆園には傲慢不遜な莊周がおり(宰相になることを断った)

また老萊の家には逸すくれた妻がおり(夫の仕官を止めた)

元来進み仕えて良き地位を得て身を保ち全うすることもできようが、

斤しりぞけられてやめた時、藩まがらみに角がぶつかって引つかかりどうしようもない羊のごとくになつて困るものだ。

(そのような) 俗世をいさぎよく去るべく(仙を求めて山林に入るべく)

うやうやしく会釈していとまごいし、伯夷、叔斉のごとき小節を去る。

〔本文〕・〔通釈〕ともに新釈漢文大系『文選(詩篇)上』に拠る。一四五―一四七頁(傍線筆者)

つまり、道真の「官舎幽趣」の根底に流れる詩情は、まさしくこの「遊仙詩七首」のそれと置き換えられるのではないかと思う。とりわけ先に傍線を付した句を道真のそれと並べるとその観を一層強くする。